

会員制情報誌「たのし」へ「金沢の酒と料理を愛した吉田健一」を掲載

氏名：西島 幸夫 職業：経営コンサルタント（ISO取得支援） 都道府県：東京都

活動報告の一端として石川のこと書いて発信しています。

拙文を読んで金沢に関心を持ってもらうことが狙いです。

名刺交換の時にCOPYを手交してPRに努めています。

今号は金沢を愛した文人吉田健一の小説やエッセイを読んで、一文にまとめました。

金沢は贅沢すればキリがないほど贅沢ができる町だと思いました。

本当に金沢は奥が深い街ですね。

掲載された記事はコチラです。



[金沢の酒と料理を愛した吉田健一.pdf](#)



金沢の酒と料理を愛した吉田健一

小説「金沢」とエッセイを読む

いしかわ観光特使 西島 幸夫

金沢をこよなく愛した文人

吉田健一（1912～77）は、故郷でも任地でもない金沢が深く気に入り、たびたび訪れていた。時には畏友の河上徹太郎（評論家）や観世栄夫（能楽師）、辻義一（料理人）を引き連れて金沢を楽しんだ。金沢への旅はおそらく1960年代から始まり、亡くなる70年代半ばまで続いた。新幹線のない時代、夜行列車にひと晩揺られてようやく辿り着く旅を楽しみにしていた。



食堂車で飲む吉田健一「作家の旅」（平凡社 2012年刊）より引用

ンブリッジ大学で学んだ。抜群の語学力と文明の厚みを身につけた英文学者、評論家、小説家、エッセイストだった。大の酒家・家で食通だったので酒の味が恋しくなるとしばしば金沢を訪れて、大友奎堂氏宅（大友楼6代目）を訪ね、金沢料理を前に杯を交わした。非常に謹厳な人らしくすぐに正座して特有の笑い声を発し、出された熱燗をグイグイ飲みだした。一切の難しい話題は断り、本当に酒の味を体いっぱい楽しんだという。

文人お気に入りの食処・酒処
旅に同伴した観世栄夫の文章から、ある冬の飲み食へ歩きぶりをみてみよう。

夜行列車で金沢に着くとすぐ定宿「つば甚」（1752（宝暦）年創業の老舗料亭）。犀川が見える眺めのいい部屋でまず一杯。ふぐの糠漬け、甘海老の味に舌つづみ。それから「大友楼」の主人邸へ。心づくしの料理で宴はすすみ骨酒となる。九谷の



犀川大橋から上流を望む つば甚は右手の寺町台地にある（写真提供 金沢市）

大鉢に焼いた鯛を盛り、熱した酒をなみなみとつき火をつけて燃し、箸で鯛の身をほぐす。杯が廻され大杯を承けてぐと飲むと、海を飲んでいるような気がする。大友邸を辞して「福光屋」の酒蔵へ。新酒のきき酒をする。それから浅野川畔の「こりや」へ。鮓の洗い、鮓のから揚げ、岩魚の骨酒が出た。襦をへだてた隣の座敷からは美しい笛の調べが流れてくる。酔いがまわって、香林坊のクラブへ繰り出し古風な店の楽団演奏を聴く。

翌日は郊外内灘の赤塚邸へ。

うなぎは庭続きの入江から獲れたもの。治部煮、小糠漬け、かぶら寿司など、凝った料理は何ともおいしい。次は市内の「日樂」（醸造元）へ。搾りたての新酒の清らかな味がする。主人申村氏の犀川を見下ろす別邸に行く。鴨の治部煮が出たが何とも言えぬ美味。宋の均窯小鉢に盛り立て、くちこが出た。均窯の淡い美しさに息をのんだ。酒の肴に名器を出して見せるとは流石に金沢だ。夜も更け、東茶屋街の待合へ行く。当地のお座敷唄を聴き夜の金沢を楽しむ。

3日目は郊外鶴来の和田屋へ。白山の伏流水で醸造された「萬歳菜」はキリッとした口当たりのいい銘酒だ。岩魚がおひし、熊のさしみ、山菜のおひたし、煮付け、いずれも味わい深い。こんな美酒佳肴の金沢へ15年も通い続けた。



浅野川の上流を望む 左手が東の茶屋街（写真提供 金沢市）

酒を生かす肴、食は文化

金沢の酒の旨さは白山水系の

水質の良さばかりでなく、酒を生かす肴が美味しいからだ。当地は日本海の海の幸と白山山麓の幸に恵まれ、藩政時代からの長い食文化が脈々と受け継がれてきた。1830（天保元）年創業の大友楼は藩の御膳所の料理方を務めた家柄。大友佐俊さん（8代目）によれば、加賀料理は京風と江戸風の融合だという。6代目は吉田健一に春、刺し網いわしの真子（卵巣）の腹しつぽいふくれたのを塩焼きにして出した。「こんなうまい魚があるのか」と驚かされたという。この刺し網いわしは安価なもので庶民が食べる魚だ。要するに、酒を生かす季節折々の食材をたぐみに調理し、これを器・座敷・人でもてなしているのだ。金沢の良さを本当に味わうならば、しばしば訪れるか、ゆつくり滞在しないだろう。遠来の文人をもてなす旦那衆がたぐさった時代かもしれないが、吉田健一の幻想的小説「金沢」（1973年刊）は、半世紀前の金沢へのオマージュ（贗作）である。（この項おわり）

参考文献

- 「金沢・酒宴」（吉田健一 講談社文芸文庫 1990年刊）
- 「汽車旅の酒」（吉田健一 中公文庫 2015年刊）所収 巻末エッセイ「金沢でのこと」（観世栄夫）